おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和３(2021)年
８月号
通巻612号
毎月23日発行
（題字　矢追日聖）

★発行日　令和３年８月23日
★発行所　大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町１の12
☎(0742)45-1192
★印　刷　大倭印刷株式会社
★定　価　１部　３００円
年間購読料3,500円（送料共）
★郵便振替　01050-6-67002
大倭出版局
URL http://www.ohyamato.jp

ミズヒキソウ（※参考まで、東方碑の鳥居の辺りで毎年咲いていた。この写真の撮影場所は不明）　井手　泉さん撮影

昭和42(1967)年8月20日（旧7月15日）　東光大祭法話より

大倭の宗教の初歩的な修養とは

法主　矢追日聖（満55歳）

東光大祭とは

暑い時季にお集まりになると、なおさら暑いと思います。ここは扇風機ありませんから、各自扇子使って、楽な姿勢で聞いて下さい。どんな態度、恰好でもかまわないので、私の話しの一部分でもいいから消化して、自分の気持ちの中にはっきりと叩き込んでほしい。

東光大祭は今年でちょうど二十回の節目に当たってます。二昔（ふたむかし）が済んだわけですが、東光大祭の意義については『大倭新聞』などゆっくりと読んで頂けば、大体わかると思うんです。とにかく一つの物事が始まる時に、それがただ人間だけの意志やなしに、神さんと人間が一緒に仕事をやる場合には、我々が予期せんような何かのお知らせとか、不思議な現象が出て来るんですね。

昭和二十一年の旧歴七月十五日、西の生駒の山に太陽が沈む、東の山からは満月上がって来るというちょうど夕暮れ時に、東からここの上空に大きく妙な光がずーっと放射状に現れてきたんです。自然現象ですから誰でも見えたやろし、科学的に説明できるんでしょう。

けれども、やっぱり神さんの方から私にお指図（さしず）があったんですね。神さんの心と人間の心が一致して、大倭式の宗教の行き方をしていくという、本当の意味で立教（きょう）開宣をする、そのキッショ（＝吉祥（しょう））にしたわけなんです。

これはまた偶然か必然か知らんけれど

も、仏教の旧歴のお盆と同じ日になってます。

色の付いていない宗教

いつも申しますけれども、私自身は宗教で一生仕事をしていくことは、あんまり好かない。極端に言えば嫌いなんですね。今日までの人達みんながやっておる宗教ならば、私が今さらやる必要はない。あんまり研究してはおりませんけれども、今までの宗教というのは大体宗教の根本精神からかなり遠ざかっているらしいんです。

ところが我々人間が生きている以上、宗教というものは自然に必要になってくるんです。そうであれば現在に必要な宗教の行き方、言い替えれば宗教の本質的、根本的な意味に基づいた行き方をしなければいけない。それが私に与えられたお役目だと信じるからこそ、今大倭としてやっておる宗教は、私が一番喜びとする行き方なんです。

大倭の宗教は、一般には新興宗教ということになるだろうし、文部省では神道の部類に入れてくれております。しかし、本当言えば神道でも仏教でもないんですよ。それも私がやっておると思えば大間違いで、ロボットや操り人形のように動いておるだけなんです。けれど私にはそうならなきゃならん運命がある。私がいつも命と言ってますが、使命とか与えられたお役目という意味のことを、日本で昔は命という呼び方をしております。そういうように生まれぬ先から持って来た命があるので、いやおうなしにやらなければならない。

教えられ学び修行したという人間の師匠もおらないんです。ここに立っておる矢追日聖という個人がね、気違いじみた変わった行き方をしておる宗教であって、どこにも所属しない。結局、霊の世界とか神さんの意志を伝えられて、私がその通りの動き方をしておるんです。

霊の世界の、いわゆる霊界人にはキリスト教も仏教も、宗派も教派も何もないんですよ。ただ人間の世界におる者が、あぁ「うちは真言宗や」、やれ「日蓮宗や」と勝手に決めているだけなんです。そういう霊界から私の所へ「こうやって欲しい、どうして欲しい」というようなことを伝達してきますから、「ああそうか、やってあげましょう」と言うだけなんです。だからここには宗派とか教派とかないんです。けれども、やっぱり宗教なんですね。言い替えれば色の付いておらない宗教です。

まず望むこと

神さんの心というものは、どこの宗教に行っても一緒やと思うんですが、ここに集まって来られた皆さん方に、私が何を一番先に望むか。それは我々人間、お互いにみんな仲良ういこうということです。

そうした時に、自分の血のつながった兄弟、親子、親類、家族やとかは大事にせにゃいかん。顔の知らない初めての人は赤の他人さんやから親切にする必要ないというような、小さい情の世界の偏見を持つことが、まず神さんの心に添わないということなんです。例えば誰かが汽車か電車、自動車にでも轢かれて死んどったとします。初めは自分の身内でないかと思って、「誰やろな?」と見に行ったところが他人さんやった。すると「ああ、可哀そうやな」という一つの同情で済んでしまう。けれども、もし自分の息子とか娘であったら、めったに見逃さず死骸に抱きついて、「何とかしないと!」と半気違いみたいになるでしょう。

これはいいんですよ、決して悪くない。我が身内に対してそれだけ情的なものを持っておるならば、ずーっと先祖さんをさかのぼって行けば、人類というのは人間対人間、お互いに一つであると理屈でわかると思うんですよ。それをなぜ、他人だという偏見を持つのかということが、今の大きな社会問題やと思うんです。

あなた達から言わせればね、大倭で信仰しとって「一体何が利益になるんやろか?」という気持ちがあるでしょう。わざわざここまで時間やら電車賃やら費やしてお参りに来て、何一つ得るとこなかったら、やっぱり人間て「アホくさい」ということになってくると思うんですね。けれどもやはり現実にお参りに来る人がおることは、一体そこに何があるのかという問題なんです。

だから、今言うような偏見とか差別とかの気持ちをまず抜くことがね、ここで信仰する人の初歩的な修行だと思うんです。そのことさえわかれば、わざわざここまで出て来なくても、自分の家でもできると思うんです。

宗教の堕落

ところが現在じっと世間を見てますと、宗教がたくさんあるがために、かえって人間を堕落させてるんです。例えばある宗教に入ったと仮定します。そのとき最初に「ここの宗教が一番良い宗教で、それ以外の宗教は悪い宗教やから、その人達を助けてやるためにうちの宗教へみんな入らなきゃいけない」というように教えられるはずなんです。

これはもう神さんの心に根本から逆らうんですよ。仏さんの心と言っても同じやと思うんです。あなた達はこれをまず知ってほしい。これは宗教に入ったために神さんの心に反した偏見を持つ。

仲良うしなければいけない宗教がまず一つの仇をこしらえているような行き方で、邪道なんです。今あなた達の目の前に見えている世間というのは、そういう偏見を持っていることが多いんですね。

大倭の宗教は、まずそのような偏見を取っていくというのが、人間として神さんの心に近付く第一歩なんです。だから神さん仏さんに手を合わせて拝んでお経唱えるようなことが功徳になると思ったら大間違いなんです。神さんの心に添わんような心を持って、自分の勝手な願い事を神さん仏さんに頼んでも聞いてくれませんよ。

それよりも仏教の場合、釈尊が「正覚を得なければいけない」とおっしゃっているはずなんです。正覚、悟りですね。またお釈迦さんはね、「衆生仏性あり」とお説きになってる。衆生はみんなが仏さんになるだけの、つまり成仏するだけの心を持ってる。みんなが仏さんになれた時に、「これは身内や、これは他人さんや」とか「自分とこの宗教だけが一番いい、他は悪いとこや」というような偏見もなくなってくる。

仏教の宗派と宗派が喧嘩したりするのは、お釈迦さんの心に逆ろうてるんです。キリスト教でも過去にそういうような意味においての災いを色々残してきたんですけれども、これは釈迦とかキリストが残したのと違うんですよ。後々の弟子たちが、一番最初の気持ちを曲げ、歪めるようになってきたんですね。

本当の信仰

それで大倭は及ばないながら、小そうてもかまわん、宗教としての真面目な行き方をしなきゃいけない。それでその第一歩というのは、言葉とすれば何でもないことなんです。今言うように「みんな仲良ういこうやないか」で、おしまいなんですよ。

ところが仲良ういける人がこの世の中に何人おるか。どこの家庭へ行っても、仲悪い親子や兄弟はほかすほどあるんですよ。ここへ来ているからみな家庭の中が良うできてるのと違いますねん。それではつまらんの。何とか自分で自分に言うて聞かして訓練しなきゃいけないんですよ。

ただ理屈でわかったってね、そこは人間ですから難しい。実際に顔を見ればやっぱり腹が立つ。そこで大倭へ出て来て、こういうような雰囲気の中において、まず自分を向上させるように努めてほしい。

例えばお稲荷さんを一生懸命に拝んで、えらい商売繁盛さしてもろた。それもまぁ結構ですねん。けれども金が儲かったら、さあ今度は家族が次から次から病気するとか、また財産ができたために兄弟喧嘩するとか、そうなればなんぼ儲けさしてもらったって罪作ったことになるんでね、そういうようなのは信仰とは言わないんですよ。

本当の信仰というものはね、自分で自分を見つめて、自分の一番の欠点を自分で直していく。自分だけではなかなか直しにくいから、例え一歩でも神さん仏さんに近付きたいという対象としてお祀りするんですよ。

それを、家の中が仲良うなるように、やれ金も儲かるように、また病気にもならんと健康でいけるようにと、ど厚かましいこと言うて拝んでね、それを聞いてくれる神さん仏さんやったらおかしなもんですよ。

この中に仏教の人もたくさんおると思いますが、お釈迦さんのおっしゃってることを、よう考えてごらんなさい。一番先に人間の修養することが大事だと、欲を五つ挙げて（※財欲・色欲・飲食欲・名誉欲・睡眠欲。広辞苑等より）、まずそれをなくせとおっしゃってるんですよ。

ところが後の坊さん達が欲なことを教えてるんですよ。例えば、葬式ならお布施をぎょうさん上げた人にはお経をたくさん上げるというようなことが多いでしょ。それやったらお坊さんの衣を脱いで、葬儀屋の看板上げて商売したらよろしい。ところが「仏弟子です。お釈迦さんの代わりを務めます」と言っておる。やっぱりお坊さんもメシ食うんですから、それを罪悪と私は言いませんけれども、末世だとして嘆かなきゃいけないというようなことになるんですね。

執着心、差別感、偏見をなくす

仏教の言葉を使えば、「般若心経」にも五蘊皆空、つまり世の中の一切と物は、皆空なんだと説いてあります。一切の物は空から出て形になって、また空に戻ると。

目の前にあるこの桜でもね、今、葉が出てますけれども、冬になったら葉も落ちて何にもない木になってしまう。それで木をなんぼ剥いたとしても、花は見えない。けれども春になると花が咲いてくる。今は何にもない空だと思って見ているのが、春になってくると花が咲いて形になって出て来る。これがつまり色なんですね。

だから皆さんも今こないしてるけれども、何年か向こうでは焼き場からボーッと煙になって白骨になるんですよ。そんなん決まり切っとんねん。これはあんた達に対する悪口でも何でもあらへん、まぁ私は土の中に埋めてもらうつもりしてますけれども、私も同じことなんです。その代わりまた皆子供ができて、またぼちぼち成育していく

わけですね。

そういうような人間のわずかの人生の中でね、今度は霊の世界に行くことも、やっぱり考えないかんと思うんです。若い者にはちょっとまだ早いかもしれんけれども、わかってんねんから私ははっきり言うんです。霊の世界に行けば、霊の世界の生活があることは、月次祭の時にいつも皆さんに話してますから、聞いている方はわかると思います。そうすると、現界のわずか五十年八十年の短い人生の中において、自分がやってきたいろんなものが原因となって、その続きが霊の世界になるんです。

例えばこの世の中で一生懸命、金を儲けて貯めて、それで自己満足して喜んでおればいいんですけれども、さて自分が死ぬ時には持って行かれへん。息切れる瞬間に「食うものも食わんと骨と皮になって、一生働いてこしらえた金を置いて死んで行かんならん。ああ情けない」と思ったと仮定する。そうすればその心を提げて霊の世界へ入って行くから、自分の背中に何千貫という金を背負って、がつがつ歩いているような苦しい思いをしなければならない。これは私は霊界が見えるから言うんですよ。

そうすると「何とかして背中のこの金を外してくれ、苦しゅうてかなわん」というような心の動き方、その思い、念というものが自分の家族へ行くんです。その死んだ人の心を受けて、今度はとにかく家にある金はもう使いとうてしゃあないというような子とか孫ができる。麻雀や競輪とか、酒や芸妓で散財したりね。ま、使い道は色々ありますけれども、そういうような結果になるということは、ものすごく金に執着して死んだ人がおる家なんです。

だから、そんなややこしい思いをこの世の中に残さないで死ぬのがいい。現界で生活しておる時、お釈迦さんのおっしゃるように五欲をなくし、何にもとらわれないような心の状態になることです。五欲をなくすというのは、また難しいからね、こんな話しはまた別にしますけれどもね。

人間としてやるべきことをやるのはいいんですよ。異性愛が欲でもなけりゃ、メシ食いたいのも欲と違うんですよ。これは人間として生まれながらに神さんから授かってるんです。

だけど物に執着して欲しがるとか、その心の問題を言うんです。それによって人といざこざや争いを起こしたり、あるいは人を恨んだりというような心の罪が良くないと言うんです。

そうすると現界においては、執着心が離れていくようにお互い修養しなきゃいけない。あるいはまた差別感、偏見というようなものもなくしていく。それだけなくなっても霊の世界に行けばかなり楽な生活できると思うんです。

まずは身近な人から

病気あるいは家庭の問題は、相談してもらえば、私の生まれながらの一つの能力ですからうまく行くようにします。けれども、そういう小さな問題よりも、もっと大きくね、どうせ人間必ず死ぬんやから、生きてる間はできるだけ自分が神さん仏さんに近付くような人間になろうと努めていってほしい。

大先祖の何憶万人と言うたってわからんですから、第一歩は自分の家庭からです。兄弟、親子、夫婦、親類とか身近なところから、いつ顔を合わしても心に一物あるような気持ちやなしに、笑うて付き合いできる、いつの日でもどんな時でもすかーっと秋晴れのような心境で話し合いできるような自分を作る。人のことどうでもいいですよ、まず自分をこしらえていくんです。だから修養するためには、自分の肉親の中においてしていくというのが一番身近な方法やと思います。

大倭には、気の短い人も長い人も、病人さんもどんな人もいろいろ集まっております。まぁ喧嘩もするし口論もする。それでもみんなやっぱり仲良うしとるんですね。それで皆さんの家庭の中もそうあってほしいと思う。

今ちょうど二百人ばかりの人間が大倭の中に住み着いておりますけれども（※大倭安宿苑の住苑者も含んでいるよう。住苑者とは、収容者というのが法律用語であったりした当時に法主さんが提唱した用語）、一人一人の人間を見た場合には変わりもんばっかりや。だから私は社会の縮図のようで非常に結構やと思います。結論において、お互いに言いたいことは言いもし、喧嘩する時は喧嘩もし、殴る時は殴ってもいい。あるいは酒飲んで転んでも構わん。けれども心の中において、人間対人間はみんな一つなんだというような、本当の和の精神ですね。「大らかにして和やか」という言葉で言うんですが、それを自分で修養していくというのが大倭の宗教の根本なんです。

今、政治家とか思想家が言うように、平和社会とか戦争のない世界とか、それは何万年後のことかわからんですよ。兄弟とか親子でも喧嘩してる時代に、地球の上が本当の平和になるはずがないんです。それよりも宗教的に修養し、神さんの道なり仏さんの道によって、まず自分自身が平和な心になり、争う心を持たない自分を作るように努めていく。それが遠回りなやり方かもしらんけれども、世界の人たちがみんな仲良くいける道だと言うことができると思います。

（文責・編集部）

私の家の歴史

～綾子（祖母）の半生記より～

奈良市　矢追　法亮

❖富雄の地に生まれ育って

私の実家は奈良市藤の木台という場所にある。以前、『おおやまと』の「足あと足おと」でも少しお話させて頂いたが（※平成30年７月号）、かつてこの地は『古事記』にも記されている伝承地の多い所であり、平城京の御造営にも参与した。昔はこの地を富雄村とよんだ。

富雄村といえば『古事記』にも描かれた神武天皇の神武東征が有名だ。西暦紀元前663年（天鈴55年）、後に神武天皇として即位する神日本磐余彦尊はこの地を支配する豪族・長髄彦と戦った。長髄彦は『古事記』では登美能那賀須泥毘古、または登美毘古という。磐余彦尊が苦戦するなか、急に空が暗くなり、雹が降り出す。その時、金色の鵄が飛来して弓先に止まり、神通力を得た磐余彦尊は長髄彦を討って勝利を収めた。この様子を見た人々は当地を鵄の邑と名付けた。この姿は第１回国勢調査の表紙となっている。

後世、鵄邑は鳥見郷または鳥見庄と呼ばれるようになり、その後、富雄村となった。私が子供の頃には村ではなくなり、実家周辺は藤の木台という住宅街となり、インフラが整い生活には何の不自由もない状態であった。近くには祖父の家があり、実家から歩いて５分もかからないことからよく遊びに行ったが、祖父の家だけはまだ造成前のこの地の面影を感じることができた。祖父は地主ということもあり家の敷地が広大であった。敷地の中には森や池、畑やテニスコートがあり、子供の頃はいとこたちと敷地内を冒険したり秘密基地をつくったりして遊んだ。

また、犬が10匹くらいいてとても賑やかだった。

私の家には不思議な伝統？がある。祖父の父が隆蔵といい、子供に「隆」の字を入れた。祖父は隆義。法主さん（※隆家）の弟にあたる。祖父もまた子供に「義」という字を入れた。父は隆義の次男で義法。私は父から「法」のひと文字をもらい法亮と名付けてもらった。私の子供は法亮の「亮」という字を入れて亮延という。なんだかおもしろい。この不思議な伝統？いつまで続くのやらである。

❖軽費老人ホームが家の仕事

私の家の仕事は業種でいうと第一種社会福祉事業。父（義法）は軽費老人ホームの施設長をしている。施設の名前は大倭滝の峯荘。施設の名前が「滝の峯荘」になった経緯は以前、お話しさせて頂いた（※古い地名）。皆さまのお力添えもあり今年で無事50周年を迎えることができた。

近年、我が国では、高齢化や人口減少が進み、地域・家庭・職場という人々の生活領域における支え合いの基盤が弱まってきている。「社会的孤立」や公的支援制度が対象としないような身近な生活課題への支援の必要性が高まり、軽度の認知症や精神障害が疑われ様々な問題を抱えているにも関わらず、公的支援制度の受給要件を満たさない「制度の狭間」の問題等が顕在化している。このような状況のなか、国では団塊の世代が75歳以上となる２０２５年を目途に、重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい生活を最後まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される「地域包括ケアシステム」の実現を図る。とともに、社会構造の変化や人々に暮らしの変化を踏まえ、制度・分野ごとの「縦割り」や「支え手」「受け手」という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えてつながることで、地域住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会を目指す「地域共生社会」の実現を図っているところである。

❖祖母（綾子）の目線で

先日、祖母の半生を祖父（隆義）がまとめた小冊子『綾子の半生記』を父から見せてもらう機会があった。矢追の歴史については私よりも皆さまのほうがはるかに詳しい。祖母目線でお話をする機会はあまりないので今回はこの小冊子の記録を中心にお話しさせて頂こうと思う。

祖母の生年月日は大正13年11月５日。世間は関東大震災の翌年でありお江戸復興にかけていた頃、林家５人きょうだいの末っ子として生まれた。実家は大阪市此花区（現在の福島区）。祖母の父は日盛商会というタイヤの裏うちをする綿布製造販売会社を経営していた。当時、自動車産業が盛んであった福島界隈に店をかまえたそうで一代で財を成した人と

ロンドンの老人ホームで見学中の祖母

ある。彼は明治8年に京都の南（現在の南区）に農家の4男として生まれた。現役の甲種合格で大津の九連隊に入り銃剣術が得意。後に日露戦争に召集され第三軍として旅順攻撃に参加、決死隊に何度も参加したが生き残り、その後、怪我で内地送還となった。商売で成功したいと思っていたようでいろんな所に丁稚奉公に行き成功までには口には表せない苦労があったという。祖母の母は助産師と看護師として働いていた。夫婦は近所では有名なおしどり夫婦だったようだ。

祖母は幼稚園・小学校と地元の小学校に通っていたが家の移転に伴い、富雄の小学校に転校した。その後、奈良女子高等師範学校（女高師）付属の女学校を卒業。小学校の教師になった後、女高師の農芸教室に移った。勤めを辞めてからは若い者は村を刷新するのだと青年団を結成。その中で青年団長であった祖父と出会い、結婚。祖父の家は村一番の旧家であった。しきたりがきびしく、祖母はなれない生活で苦労が多かったようだ。

結婚当時、祖父は村会議員だったが奈良県庁に職場が変わった。祖父は社会福祉事務所長をしていた関係から老人の悲劇をたくさんみていたので老人ホームを建てようと思っていたらしい。

たまたまその頃、造成ブームで土地売却の話が出た。その土地は先祖代々所有して来た所であり、祖父の父である隆蔵が開墾した所であった。隆蔵はここに寺を建てたいと考えていたようだが、法主さんと祖父で相談した結果、世のため人のためになるよう形あるものを残したいと考え、軽費老人ホームを建てる計画となったようだ。

祖母はその施設の施設長になった。当時、まだまだ男性社会のなか、女性の施設長は少なかったが祖母の福祉への熱意は強かった。ヨーロッパの老人ホーム視察や国内の研修に全国を飛び回り、よいアイデアがあれば即施設に持ち帰り実践していた。祖母が福祉の仕事に携わったのは、幼い頃に祖母の父が寄付などを通じ人々を救っていた姿を近くで見て育った影響も強かったようだ。祖母が存命のうちにもっと話をしたかった。

後に祖父が祖母に施設長を任せたことについて、「苦しかった、長かったトンネルの中で、よけいな苦言も云わず、よく矢追の家を守ってくれた。このホームを拠点とし、失われていた青春時代を取り戻し、誰にも遠慮することなく羽を伸ばし、自由な大空の下、思う存分謳歌してほしい気持ちで一杯であった」と『綾子の半生記』で述べている。祖父の祖母への愛を感じる。

その後、祖母は74歳まで施設長を務め施設のみならず福祉業界の発展に寄与した。祖母の両親がおしどり夫婦であったように祖父母も仲が良かった。私の記憶では祖父母が喧嘩しているところはいちども見たことがない。思い出す祖父母の顔はいつも笑顔である。祖母が他界して1年後の同じ日に祖父が他界した。祖母の両親に負けず劣らずのおしどり夫婦であった。

❖「福祉」について考える

法主さんは『おおやまと』のなかで大倭の福祉施設は霊界人（光明皇后）との話し合いでやっているとお話しになっておられる。光明皇后といえば施薬院や悲田院など社会福祉の創始者としても有名な人物。私の家は「福祉」との関わりが深いので福祉とは何かを昔、調べたことがある。

それによると、そもそも福祉という言葉は戦後に生まれた単語のようだ。第二次世界大戦で負けた日本はGHQの支配下となる。やがてGHQはWelfareを意味する単語を日本国憲法に表記するようにと命令を出した。当時、日本は福祉という単語が存在しなかったのでWelfareを表す日本語を作った結果、福祉という単語が誕生した。

福祉という単語に注目してみると福祉の福は幸福の福。そして福祉の祉には神の恵みという意味が込められている。福にも祉にもネという字が入っているがこのネの旧字にあたるのが象形文字の「示す」になる。どうやら「示す」には神や天という意味があるようだ。

❖法主さんの言葉

～人として向上していく道～

私が法主さんとお話しさせて頂くことが多かった時期は私が思春期だったこともあり、特に感情の起伏が激しい頃であった。その時、法主さんがお話し下さったことは今も大切に記憶に残っている。その内容は、人間は喜怒哀楽という感情を持っている。利害関係があったり劣等感や優越感を持っているので喧嘩になる。なかなかむつかしいけれども、生きている間に仲良うせぇ。そういう人間になってほしい。というものであった。

また、大倭教について法主さんが「神さんが幸せにしてくれんのと違いますよ。人間との結びつきが親密になってこそ、お互いに幸せになるんです。皆と仲良うに、自分で幸せに行けるような人間になることが大事なんです。自分のものというのは自分の心だけなんです。それが信仰の原点。自分のものがないものとして考えた時には、人間みんなが仲良うなれる。ところが人間というのは我がものだというような欲が出てきて、ケンカしたり争いを起こしたりする。我がものというのは自分の心だけ。心というのは霊魂のことです」とお話しになっておられた。

私のなかで今も大切にしている法主さんのお言

葉であり、人生の道しるべとさせて頂いている。

❖あとがき

私は幼稚園・小学校・中学校は富雄南を卒業した。祖父も父も私も子供も小学校は富雄南に通っており、ずいぶん長い間この地で生活を営んでいるのだなと感じている。今年の４月から長女が富雄南小学校の新１年生となった。なりゆきで毎日、小学校までの道を一緒に歩いている。私の通った通学路とは違う道だが小学校までの道を歩いていると、児童数の減少や通学路の危険個所の改善・整備といった当時との変化を感じる。

しかし、今も昔も生徒達が楽しそうに通学していく姿は変わらない。あらためて大人の目線で歩いていると、通学中多くの保護者や地域・関係機関の方々に見守られていたのだなと今さらながらに感謝をする。その中で大倭を知って下さっている地域の方も多く「大倭の○○さんにはお世話になって」という声をかけて頂くことも多い。

先輩たちがそうしてこられたように私もそうありたいと思うと同時に私なりに地域にできる還元方法を考える。祖父母が大切にしていた「報恩感謝」の精神。受けた恩は必ずお返しする心構えは人たる者、誰もが忘れてはならないという格言は私も大切にしていきたいと思う。

大倭会通信

【新体制での活動の在り方について】

７月23日月次祭のあと役員会が行われました。コロナの流行中、リモートで文化講演会ができないかという話題等々がありました。

以下、役員会欠席だった方からの手紙を紹介します（一部省略あり）。

▼群馬県安中市　桜井節子（顧問）

お役を引き受けたのは良いのですが、出席できないので申し訳ありません。ここ１、２年外出は極力ひかえ、生活必需品購入のみの生活をしています。いよいよ夏も本番ですが、このむし暑さは大の苦手です。

見渡せば上毛の山々も日を増すごとに緑がきわだって個性豊かな姿に力強さを感じます。広いすそ野の赤城山、見る場所によって変化にとむ榛名山、奇山と言われる妙義山、大きなつばさを広げて北風から我々を守ってくれているように思えます。夕暮れの一時はまるで水墨画を見るようです。遠くに目を移せば火を噴く浅間山、雪化粧の時の姿は一段と美しい。３６０度山に囲まれ、この大地に根を下ろした古代人や昔の人達は、どんな思いだったろうかと、感傷的にもなります。

生かされているあり難さや厳しさも知っていて、きっと朝夕、今日一日の無事を最大限祈りに込めたにちがいない。今まで外に目を向けがちでしたが、コロナ禍の中で、あたり前のように思ってしまう山々、自然の存在の大きなことに気付かされる最近です。（新皇教宮関係）

▼奈良市　竹内靖

４年前に半ば押し付けで、会計を溝口さんに引き受けてもらい、その後一度も大倭会の会議や催しに参加出来ず申し訳なく思ってます。その間に大倭の環境は大きく変わり、一歩後退、二歩前進。少しでも大倭が良くなるように又、幸せになるよう皆様と共に力を合わせて頑張らねばなあと思います。（大倭殖産）

▼京都府八幡市　湯浅進（顧問）

この度、顧問に名前を連ねることになり、大してお役に立ちませんがよろしくお願いいたします。

ＦＩＷＣのメンバーが初めて大倭の地を踏んでから60年、そして法主さんから土地提供を受けて「交流（むすび）の家」建設運動が始まってからは58年、建物が竣工してからはこの７月30日で54年になる。「ＮＰＯ法人むすびの家」の形態をとって18年になるが、今も「交流の家」は大倭の一端として受け入れてもらっていると思う。

最近はＦＩＷＣ関西委員会の現役学生がほとんどいなくなり、そこにコロナの感染拡大でワークキャンプ活動は難しくなっている。コロナの沈静化を見ながら、今秋からでも再開できるよう計画を立てていきたいと思っている。

『おおやまと』４月号、鶴見先生と法主さんの対談で語られた「むすびの家の明日」や、それを読んで「今こそ交流の家の存在は求められています」（６月号・加藤彰彦）とありました。大倭（会）の人たちの協力を得て、少しでも実りのある「むすびの家」を続けたいと思います。とはいえ、こちらは先がもう少し。次の人たちにつないでいくのが一番大事なことだと思っているのですが……。（ＮＰＯ法人むすびの家理事長）

▼岡山県真庭市　湯浅芳郎（顧問）

欠席、失礼します。小生、お米・野菜の農業と俳句つくり。家内（晴子）はお母さんのお世話です。月の６・15・23日は、こちらでもお祭をしています。

体力・気力も低下してきてますが、６月号『おおやまと』の法主さんのお話により、「生まれ変わると信じ合えれば」、とても気が楽です。また『虹の断片』の本の紹介により、物事は前向きに取り組んでいれば開かれるのかな、と思いました。

……

●６月号の尋ね人（？）の佐藤明子さんよりお電話がありました。ネットで『おおやまと』を読んでおられたとのこと。北海道室蘭市の方。

あじさい日誌

7月9日　梅雨明けを前に蝉の声。季節は動いている、〝コロナばかりで蝉のことは、すっかり忘れていました〟(ポン)。

7月11日　奈良市長と市議会議員選挙がありました。

7月15日　大倭神宮月次祭。

7月17日　午後から奈良県桜井市の青木なぎささんが来邑、杉本順一さんが応接。

7月土用　大倭の梅が成り年とか、梅干し作りで梅の干されているのがよく見られました。

7月23日　大倭大本宮月次祭。

この日は昭和42年7月23日の法話をお聞きしました。ちょうど発行された『おおやまと』7月号に「神ながらの味を心で掴む」として掲載分。

午後4時から大倭会館において大倭会役員会(7頁「大倭会通信」参照)。

8月1日　4月から京都のお寺に勤めている大倉有宏さんが午後、来邑。法主さんについて杉本さんとあれこれのお話。

8月2日　大倭神宮のナガソネヒコ命やニギハヤヒ命の伝承に関心を持たれている桐畑良之助さん、川田素子さん、剣鞠さんが突然、来邑されました。

8月6日　広島に原爆が投下されて76年。午前8時15分、拝殿の大太鼓が、故反保隆臣さんの跡を継いだ形の李章根さんにより打ち鳴らされました。

〝『原爆供養塔―忘れられた遺骨の70年』堀川恵子著(文春文庫)を読み、大倭で経験する事を通して、改めて顕幽不二を考えました〟(章)

午後、大倭神宮月次祭。

夜6時半から大倭会館において邑倭の会が開かれました。

大倭安宿苑では

7月27日　今年度2回目の新入職員研修会が行われました。(菅原園)

7月7日　短冊を読み上げたりカラオケや和菓子で、小規模ながら七夕の集いを開催。

7月30日　第1回目のコロナワクチン接種が行われました。(須加宮寮)

7月23日　オリンピックの開会式を皆さんが見ていました。

7月23日　職員と共に法人倉庫前の掃除をしました。(長曽根寮)

7月13日(デイ)　作品づくりで、ストローと厚紙を使って竹とんぼを作り、皆で飛ばしました。

7月16日(特養)　苺シロップと練乳のオリジナル手作りゼリーを乗せたりしてかき氷大会。(茂毛路園)

7月27日　午後、定例懇談会。5名の方が参加されました。(八重垣園)

7月30日　食堂にてかき氷。暑い日が続く折から好評でした。

こだまことだま

▼大阪府大東市　**坂田洋美**

霊界のこと、死んでお終いの世界ではないこと、生まれかわりのこと、6月号ありがとうございます。生まれかわりのことを心にかけていた若い人がいるので、この号をあげようと思います。

▼大阪府茨木市　**杉　明子**

(略)　この度『おおやまと』令和3年6月号をお送り下さいまして、ありがとうございます。通巻610号――長いですネ。私が初めて紫陽花邑を訪問させていただけましたのは、52年程前になりますが、以来何のお役に立てることもなくご縁をいただき続けております。

亡夫の浩史は、それはそれは毎月、跳び勇んで奈良に向かって出かけ、帰宅後は何やら充実した表情を私にも見せており、机にも向かい書きものをしておりました。

ありがたい心の在り場所、ふる里、今もそちらで皆様の話題にもして頂けております様子、重ねて感謝申し上げます。次の世、もしも生まれかわれて、どんな生き物としても、きっと大倭の地で生存していると想っています。

▼青森市　**高橋末子**

昨年から私ごとで大変ご迷惑をおかけしました。不快な思いをされたことと存じます。1年以上苦しみ、心落ち着くことが出来ませんでした。

しかし『おおやまと』の6月号を読んで救われました。私のために書かれたように思われ、何度も読み返しました。(略)殺したり殺されたりした敵が夫婦や親子、兄弟姉妹で生れたりそんな人間関係のあることが納得いきました。そうしたら苦しさも憎しみも悲しさもなくなりました(ほとんど)。今は少しずつ元気をとり戻しています。

波紋

コロナ禍が始まって、1年半、世の中に様々な波紋を投げかけています。無論、私の生活にも影響はあって、現在まで人様に語学をお教えすることを生業にしてきたのですが、思いもかけずオンラインによるｚｏｏｍ授業なるものを始めるきっかけとなりました。

最初は、そんなものが私にも出来るのかと悩み、不安でした。しかし、長年勤めた学校から、「出来なければ、辞めてもらう」みたいな無言の圧力もかかり、なんとかしなければと、気を取り直してみれば、家族の協力も得て、えらいもので、なんとか無理なくこなすことが出来ました。

そして今や、昨年の春以来、既に数百時間に及ぶｚｏｏｍによる授業を行ってきました。語学の習得にとっては、対面授業が一番好ましく、効果のあるものであることは、私自身経験上確信していますが、オンラインによる授業も、やってみると、それなりの成果を上げることが出来るとわかりました。

また、今回のことで、今まで考えもしなかった新たな活動への場を広げることが出来たことは嬉しいことでした。

これまさに、私にとっては、今回のコロナ禍が生んだ新たな世界へのキャリアアップという結果ともなりました。

「禍転じて福となる」ともあるもので、これからも気を取り直し、コロナ福の一つ、二つを探してみることにします。

(林　修三)

あんない

＊月次祭(大倭神宮)
9月6日(月)　午後2時より大倭神宮にて。

＊大倭会主催禊会
9月12日(日)　中止とします。

＊月次祭(大倭神宮)
9月15日(水)　午後2時より大倭神宮にて。

＊月次祭(大倭大本宮)
9月23日(祝)　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。